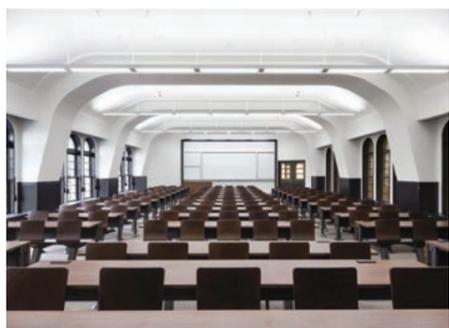




旧3号館の塩焼瓦を再利用



中庭空間を再現したエントランス



旧3号館講堂の意匠性を再現



高層棟が後退し既存棟と調和



# 早稲田大学 早稲田キャンパス3号館

## 選評

一九三三年に竣工した早稲田大学旧3号館は、大隈記念講堂と大隈重信像を結ぶキャンパス内の東西に走るメインモールに南面のファザードが顔を持つ建物であった。長い年月の間に繰り返された増改築の中で北側部分が増築され「ロ」の字型で中庭のある建物となり、大学関係者には中庭のある校舎が記憶に残る存在となった。

一九九七年には将来のキャンパス計画をふまえて「早稲田大学整備指針」がまとめられ、旧3号館がある東のエリアは大隈記念講堂を中心とした歴史継承ゾーンとして位置づけられた。しかしながら旧3号館においては建物の老朽化も著しく、耐震性やバリアフリーへの対応も不十分であるばかりか、近年の高度化かつ多様化した教育研究活動には面積的にも不足しているうえにフレキシビリティにも欠けるといった理由から建て替えを行うこととなった。以上のような課題を歴史継承ゾーンのなかで実現するためのひとつの解が旧3号館を「再現棟」として建て替えるという選択肢であった。

新築された「早稲田キャンパス3号館」は四階建ての再現棟と、再現棟の「葺(≡棟瓦)」部分までセットバックされた一四階建ての高層棟というふたつのボリュームによる構成である。高層棟をセットバックさせ、再現棟の軒は旧3号館のスカイラインを維持することにより歴史を継承する修景が担保された。また再現棟においては、旧3号館の一九三三年竣工当時の建物ボリュームとプロポーションを再現すること、屋根材の塩焼瓦を再利用すること、竣工当初の素材・色彩に再生することを基本に

BCS賞は、建築の事業企画・計画・設計、施工、環境とともに、供用開始後1年以上にわたる建築物の運用・維持管理等を含めた総合評価に基づいて選考し、建築主・設計者・施工者の三者を表彰する建築賞です。  
この賞は、1960年にはじまり2017年で58回を数えます。

< 2017年 第58回 BCS賞受賞作品 > 静岡県草薙総合運動場体育館(このはなアリーナ) 新宿東宝ビル 太子町新庁舎「太子の環」人がつどう・まちをめぐる・太子がつながる 竹中工道具館新館 敦賀駅交流施設「オルパーク」駅前広場キャノピー TSURUMI子どもホスピス 東京駅八重洲口開発: グランルーフ、グラントウキョウノースタワー、グラントウキョウサウスタワー、駅前広場 TOTOミュージアム 桐朋学園大学調布キャンパス1号館 としまエコミュニセタウン TOYAMAキラリ 虎ノ門ヒルズ(環状第二号線新橋・虎ノ門地区第二種市街地再開発事業Ⅲ街区) 直島ホール MIZKAN MUSEUM YKK80ビル [特別賞]日本橋ダイヤビルディング [江戸橋倉庫ビル]の保存・再生 早稲田大学 早稲田キャンパス3号館



# 建築主

より **キャンパスの歴史を次世代に継承する  
最新の教育研究環境**

3号館は、「早稲田キャンパス整備指針」(1997年)において可能な限り景観を保存する歴史継承ゾーンに位置していたため、大学の伝統を継承し将来にわたり早稲田の象徴的な雰囲気を残すことを目指しました。

一方、現代社会を取り巻く多くの課題は地球規模で考えなければならず、その解決に向け自らが考え、行動し、他者と協働するグローバル人材の育成を目標に掲げる本学にとって最新の教育研究環境であることも重要でした。

この方針を設計者の(株)久米設計さんと施工者の戸田建設(株)さんに深く理解、共有いただくことで具現化できた3号館から、本学が多くのグローバル人材を輩出し次世代に記憶として継承していくことで、本計画に携わられた関係者の方々の想いに応えていきたいと考えています。

末筆ながら名誉ある第58回BCS賞特別賞にご選考いただいたことに改めまして感謝申し上げます。



学校法人早稲田大学  
キャンパス企画部  
企画・建設課長  
**北野寧彦**  
Yasubiko Kitano

# 設計者

より

**歴史を積み重ねてきた「風景」を  
次世代に継ぐ新校舎**



株式会社久米設計  
設計本部 本部長  
**山本茂義**  
Shigeyoshi Yamamoto

旧3号館は、1933年の竣工から77年の間、増改築を重ねながら、数多くの大学関係者の方々の思い出の場となってきました。キャンパス内の歴史継承ゾーンに位置し、大隈記念講堂と大隈重信像を結ぶメインのモールに面する新3号館は、周辺建物との連続性をつくりだすため、旧3号館の竣工当時の意匠を再現し、かつての情景を将来へつなげる計画としています。「再現棟」は表層だけではなく、

建物のボリュームや素材感を再現し、それが先進的な「高層棟」と組み合わせられ融合されることで歴史と未来が混ざり合う空間をもつ新たな3号館を創ることを目指しました。「<sup>そび</sup>聳ゆる薨は我らが母校」という校歌の一節を守るべく、高層棟は再現棟の「薨(=棟瓦)」部分までセットバックし、スカイラインを維持することで歴史を積み重ねてきた「風景」を次世代に継ぐ計画としています。

# 施工者

より **ものづくりへの挑戦から生まれた建物が、  
喜ばれ記憶に残ることを願って**

本建物は、最新技術を駆使した「高層棟」と、伝統技術を盛り込んだ「再現棟」を同時に組み上げるといふ、施工者にとって非常に挑戦しがいのある工事でした。「高層棟」では、複雑な鉄骨架構や多種のカーテンウォールで構成される外装の課題に取り組むとともに、「再現棟」では、旧3号館に施されていた左官伝統工法である洗い出しや研ぎ出し仕上げの再現などにも取り組みました。多くの人々が訪れる

大隈記念講堂に近接した工事場所で、第三者の安全確保を徹底するとともに、品質確保と生産性向上を実現するために、工事関係者が一丸となって各々の課題について丁寧に提案を重ね、解答を導き出してきました。

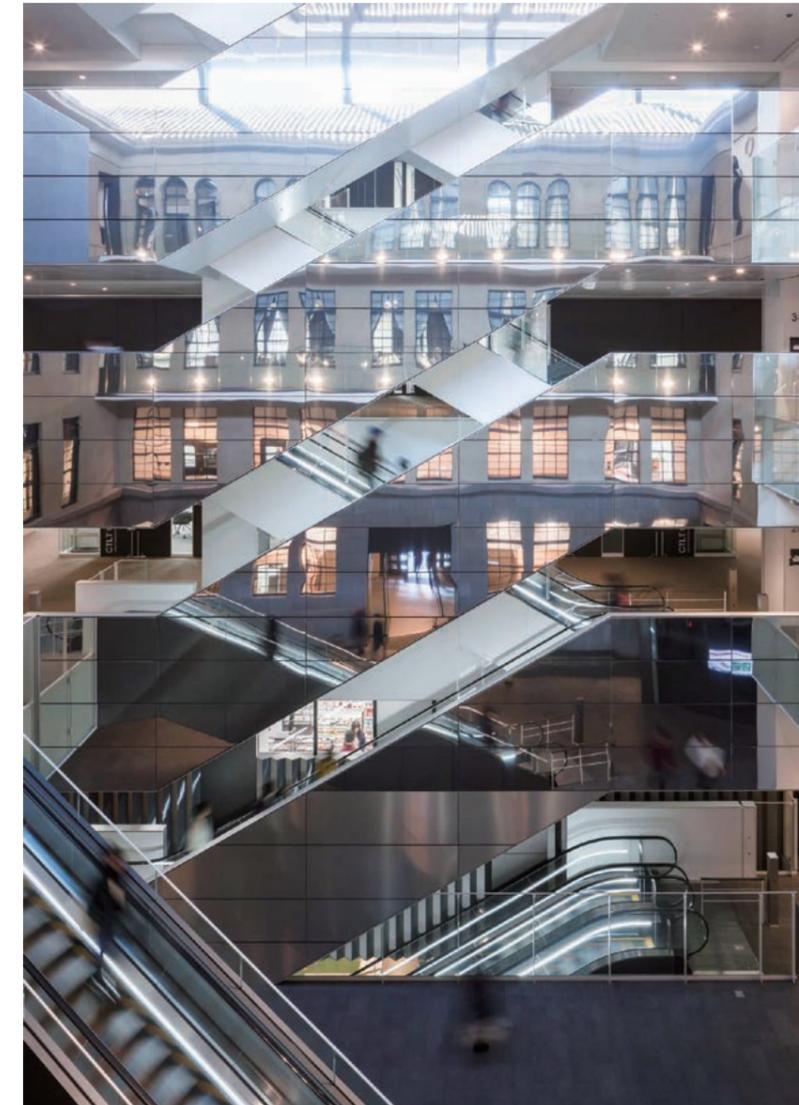
この美しい建物は、全工事関係者の“技”によって完成に至っています。本建物が、人々に喜びを与え、記憶に残る建物になっていくことを願っています。



戸田建設株式会社  
東京支店  
建築工事2部工事1室  
作業所長  
**平岡佳樹**  
Yoshiki Hiraoka



職人仕上げによる質感の継承



鏡面パネルに映し出される再現棟

実施された。地下一階から一〇階までの一一層の吹き抜けエントランスホールは再現棟の北側壁と高層棟のエスカレーターが向き合うかたちとなっているが、エスカレーター壁面を高反射素材とすることで再現棟が映し込まれ、中庭という過去の記憶を湧き起こさせる設えとなっている。また、高反射素材は一〇階のトップライトから降り注がれる自然光を低層部まで

導くためにも有効となった。景観的な配慮から再現棟のスカイラインを維持してセットバックされた高層棟ではあるが、高層棟が再現棟のうえに大きく張り出し再現棟の棟瓦部に覆いかぶさる結果となった断面構成は、構造設計者および施工者にとっては大変なチャレンジであった。再現棟はSRC造、高層棟は柱の無い大空間を達成するために外周がSRC、内部がCFT柱を中心とした鉄骨造として解かれており、両棟にはそれぞれ制震部材が組み込まれている。また剛性の異なるふたつの棟は鉛直および水平方向にエキスパンションで分離され、地震時における二棟の違った動きを吸収するためのオイルダンパーが棟間に設けられている。

歴史の継承と共に建物が健全なかたちで延命され使い続けられることを目指す保存再生の課題に対し、本再現棟はひとつの可能性を提示してくれた設計解として評価に値する。

【選考委員】  
木下庸子・堀場弘・山本朋生

計画概要

建築主：(学)早稲田大学

設計者：(株)久米設計

施工者：戸田建設(株)

所在地：東京都新宿区西早稲田 1-6-1  
竣工日：2014年9月18日

敷地面積：73,673㎡  
建築面積：2,340㎡  
延床面積：28,471㎡

階数：地上14階、地下2階、塔屋1階  
構造：鉄骨造(一部鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄筋コンクリート造)